

雜 報

會 員 動 靜

敘正七位	從七位	松本武一郎 (十二月十五日)	步兵第十八聯隊 附陸軍一等軍醫	吉永義雄
	衛生技師	吳泉 (十二月二十日)	免本職補步兵第十聯隊附	(十二月二十二日)
陸シテ高等官六等ヲ以テ待遇セラレ			岡山醫科大學教授	好本節
	從五位勳四等	片山雄 (十二月十七日)	岡山醫科大學教授	安藤畫一
敘勳三等授瑞寶章			歐米各國へ出張ヲ命ス	(十二月二十四日)
電信第二聯隊附 陸軍三等軍醫正		松原愛次郎	金澤醫科大學助教授	松本武一郎
免本職補羅南衛戍病院附			本俸十一級俸下賜	(十二月二十八日)
輜重兵第五大隊 附陸軍一等軍醫		太田幸衛	陸軍一等軍醫	倉内嘉也
免本職補廣島陸軍幼年學校兼同校教官			依願豫備役被仰付	(一月六日)
步兵第七十六聯隊 附陸軍一等軍醫		明渡侃治	文部省學校衛生官	大西永次郎
免本職補步兵第六十一聯隊附			岡山縣へ出張ヲ命ス	(一月四日)
廣島衛戍病院附兼陸軍 運輸部附陸軍一等軍醫		後藤英明	海軍機關學校附 海軍軍醫中尉	眞玉三次郎
免本職兼職補騎兵第五聯隊附			兼補舞臺要港部部員	(一月十日)

◎學位授與

○齋藤治君は豫て岡山醫科大學に論文を提出し學位を請求し居られしが去月二十四日付授與されたり

主 論 文

子宮體部血管ノ研究補遺 (邦文) (大正十五年四月岡山醫學會雜誌第四三五號ニ掲載)

参 考 論 文

1. 子宮體部粘膜ノ糖化酵素ニ就キテ (邦文) (大正十五年三月岡山醫學會雜誌第四三四號ニ掲載)
2. 卵巣皮様囊腫病理知見補遺 (邦文) (大正十二年十一月岡山醫學會雜誌第四〇六號ニ掲載)
3. 子宮圓切帶ノ強靱性ニ就キテ (獨文) (大正九年三月日本婦人科學會雜誌第十五卷第三號ニ掲載)
4. 子宮癌腫ノ純形態學的組織的統計的觀察 (邦文) (大正十年九月岡山醫學會雜誌第三八〇號ニ掲載)
5. 種々ナル腦下垂體製劑ノ效力比較 (邦文) (大正十一年八月岡山醫學會雜誌第三九一號ニ掲載)
6. 預防的蟲嚙突起切除ニ就キテ (邦文) (大正九年六月醫學中央雜誌第三二七號ニ掲載)
7. 畸形兒「エビクナーツ」ノ一例 (邦文) (大正十年五月岡山醫學會雜誌第三七六號ニ掲載)

○高橋義藏君は豫て岡山醫科大學に論文を提出し學位を請求し居られしが一月六日付授與されたり

主 論 文

甲状腺及ピ上皮小體ノ生理補遺

- 其ノ一 瓦斯新陳代謝ニ關スル甲状腺及ピ上皮小體ノ作用ニ就テ (獨文)
(大正十五年五月岡山醫學會雜誌第四三六號ニ掲載)
- 其ノ二 糖新陳代謝ニ關スル甲状腺及ピ上皮小體ノ影響 (獨文)
(大正十五年十一月岡山醫學會雜誌第四四二號ニ掲載)
- 其ノ三 「クレアチン」及ピ「クレアチニン」新陳代謝ニ關スル甲状腺及ピ上皮小體ノ關係 (獨文)
(大正十五年十一月岡山醫學會雜誌第四四二號ニ掲載)
- 其ノ四 甲状腺及ピ上皮小體ノ組織酸化力ニ及ボス影響 (獨文)
(大正十五年十二月岡山醫學會雜誌第四四三號ニ掲載)

參 考 論 文

- 其ノ一 正常及ピ脾臟摘出鼠ノ呼吸新陳代謝基礎價測定試驗 (獨文)
(一九二四年獨國生物化學雜誌第一四五號ニ掲載)
- 其ノ二 大腿骨超幾斯ニヨル「ヘキソ-セ. モノフォスフォール」酸ノ醗酵素的分解ニ就テ (獨文)
(一九二四年獨國生物化學雜誌第一四六號ニ掲載)
- 其ノ三 種々ナル臟器ニヨル「ヘキソ-セゲフォスフォール」酸ノ分解ニ就テ (獨文)
(一九二四年獨國生物化學雜誌第一四五號ニ掲載)
- 其ノ四 「タガゲアスターセ」中ノ「イヌラーセ」ノ發現ニ就テ (獨文)
(一九二四年獨國生物化學雜誌第一四四號ニ掲載)

◎親近醫學の進歩短見 在伯林 醫學博士 石田堅三郎氏通信

自然が吾人に投ずる慘禍の中、疾病程悲惨にして且普遍的のものなかるべし。之を絶滅して人生を延長せんとする理想の下に本年度1926年に於ても亦醫學は幾多の施設を完成し夥多の業績を完了し一段の進歩を示せり。歳晩に當り之を回顧し其重要なるもの二三を擧ぐれば

1. 癌の研究 一方 Gewebezüchtung により他方 Biochemische Untersuchung により其發生原因に就き最近注目に値すべき且信憑するに足る研究續々發表せられつつあり。即ち Fischer 及 Carell は胎生組織を培養して之に Oxydationshemmendes Mittel (Arsen) を作用せしめて遂に該胎生組織に癌性變化 (Carcinomatöse Wucherung) を起さしめ實驗的に生理的組織を病的癌様組織に變化せしむることに成功したるこそ。之と共に他方に Warburg は組織呼吸の研究上癌の原因説明に關し前兩者と同一の結果に到達すべき多くの成績を擧げつつあるこそ。

之を要するに、昨夏突然英國に發表せられたる「癌の發生は超顯微鏡的微生物に由る」てふ細菌發生説は追々其形影を失ひ最近に於ては非細菌發生説が漸次確固たる地歩を占め來りつつあり。

2. Vitamine の研究 殊に之と或る種の疾病との關係は益々闡明せられ今や臨牀醫家には Chronaxie が一般に Untersuchungsmittel となされ、電氣興奮を患者に作用せしめて其刺激時間を測定することとなれり。

3. 傳染病豫防上、さきに Besredka により唱へられたる Perorale Immunisierung (經口的免疫法) が實際に有效確實なることを證明せられてより、殊に不自然なる注射的免疫法に代り廣く行はれんとする傾向にあり。Scharlach 及 Masern の豫防上本法の應用は既に否認すべからざる結果を提供せり。

4. 治療上に於ては Minkowski の教室に在る Frank が實驗發表したる糖尿病の Heilmittel こそ近來活目に値すべし。是は Synthalin と稱し合成し得る一種の Guanidinderivat にして少くとも或種の糖尿病には驚くべき效能を有すること確實なり。

5. Malariaimpfung によりて Paralyse 即ち晩期の數毒を治せんとする療法は既に論争の範圍を脱し廣く實地に行はれつつあり。

~~~~~

◎第六回大日本生理學會總會 來る四月五日、六日、七日の三日間岡山醫科大學に於て第六回大日本生理學會總會を開催する由。追て出演者は三月十日迄に六百字以内の抄録を添へて生理學教室生沼教授宛に申込まれたしとの事である。